

スズメバチの習性と駆除について

日本のスズメバチ

日本には北海道から南西諸島に至るほぼ国土全域にわたって、計 16 種のスズメバチが生息している。

本州には一部南西諸島固有種を除きそのほとんどが分布しているが、多くは人里離れた山間部に営巣する種で、数も少なく人間に害を及ぼすことは稀である。

悪役の代名詞のように言われるスズメバチだが、当然ながらやはりそれなりに自然界での存在意義をもつ生き物には違いない。

そもそも、アシナガバチをふくむスズメバチ類は山野の他の昆虫類を狩って幼虫に与える狩り蜂で、食物連鎖を通じて生態系のバランスを保つ上で重要な役割を果たしている。

それはちょうどミツバチが花を訪れることによって受粉を助け、植物の世代交代に関わるように、スズメバチは山野の草木を害虫による過度の食害から守ることによって植物界に貢献している訳である。

しばしば刺傷害を引き起こすのは数種で、なかでも営巣数と個体数が群を抜いて多いキイロスズメバチや巨大なオオスズメなどは特に危険な代表種と言える。

キイロスズメバチより一回り大きなモンスズメバチは、前者ほど繁栄しているわけではないが、やはり性質は攻撃的で注意を要する種のひとつである。

また数も少なく、比較的おとなしい性質のコガタスズメバチの場合は、低い場所、特に庭の生け垣などに好んで営巣する傾向があり、巣の存在に気がつかず剪定作業を始めてしまつて刺されることが多い。

同じような事故はアシナガバチでもよく起きる。

両者とも特に枝の密集した内部に巣を作るので外から見つけることは難しい。

つぎに住宅地域やその近郊で刺傷被害の多い種類を表にしたが、モンスズメバチについてはキイロスズメバチに習性がよく似ているので省略することにした。

ただしこの種は日本産で夜間でも活動する唯一の種とされている。

キイロスズメバチ

体長・体色	18mm～28mm 小型種。 腹部全体に黄色斑、全身黄色長毛に覆われるために全体が黄色く見える。通称アカバチ。
営巣場所	営巣場所は広く、木の枝・崖・軒下などの開放空間から樹洞・屋根裏・壁の間などの閉鎖空間まで、ときには直径が数十cmに達する巨大な巣を作り、いよいよ空間が狭くなると広い場所へ集団で移住する。 (突然、屋根裏の通気孔から出入りを始めるケース) 日本産スズメバチの最優勢種。
攻撃性	極めて強い攻撃性・飛行が敏捷で人は逃げきれない。 個体数が最も多い。 数百～数千の数に達する最盛期には半径 10m 以内に近寄ると危険。 特に初秋の頃には、天敵のオオスズメバチが巣の周囲を窺うようになり、キイロスズメバチの警戒心が極度に高まり、さらに危険性は増す。

オオスズメバチ

体長・体型 体色	本邦最大種・雌蜂は 40～45mm に達する。 頭部大きく、頬が発達して一見して獍猛な印家。 全体橙黄色。
営巣場所	地中・樹洞など閉鎖空間。 人家に営巣することはまれ。
攻撃性	攻撃性強く、刺されると強烈な痛みを起す。 幼虫の餌のために主としてコガネムシ類を狩る。 夏も半ばを過ぎて昆虫が減ってくると、他の社会性ハチ類を襲う。わが国ではミツバチの大敵として知られている。 巣の近くや他の蜂の巣を攻撃しているときに不用意に近づくと危険。(ホバーリングをしながら上項を噛みあわせてカチカチと警戒音を発するので、静かにその場を離れること。)

コガタスズメバチ

体長・体型 体色	オオスズメバチに似るが小型。 頬の発達は普通。 22～29mm.
営巣場所	比較的低い場所を好む。 枝の混んだ低木に営巣する傾向が強く、生け垣が格好の営巣場所になる。 黒と白のまだら模様の美しい巣を作る。
性質	最大でも直径 15～20 c m の巣。 温和で数も少ないが、巣を揺らすような行為は危険。

スズメバチの生活史

スズメバチ環はアリやミツバチと同様、社会性昆虫として集団生活を営むが、原則としてその営巣活動は1年限りにとどまる。

新しいコロニーは春に越冬から目覚めた1頭の女王蜂によって創設される。

この女王蜂は前年の秋には交尾を済ましていて、1頭で巣作りから狩り、育児までこなすが、やがて最初の子供たち（ハタラキバチ=不妊のめす）が羽化して出てくると、前者は産卵に専念し、後者は他の一切の仕事を受け持つ集団分業生活に入る。

コロニーは急速に発展し、晩夏から秋にかけてハタラキバチの数はピークに達する。

この頃には次世代のオスと新女王が生産される一方、創設女王の寿命は尽きてしまう。

産卵の停止したコロニーは急速な衰退にむかう。

オスと新女王は野外で交尾をした後、新女王だけが越冬に入って翌春まで休眠する。

コロニーの終息はハチの種類やその年の気候などによって違ってくるが、遅くとも初霜の降りる頃、通常この辺りでは11月半ば頃になる。

日本におけるスズメバチの被害

刺傷被害には様々なケースがあるが、不用意に、あるいは偶発的に巣を刺激してしまった結果起きる場合と、ハチの種類や季節的な影響によって、人間がなんら刺激的な行動をとらなかったにもかかわらず刺されるときがある。前者には林業や庭園管理に従事する人たちの事故が挙げられる。

一方、秋になって今までおとなしくしていた蜂が急に攻撃的になり、被害が多発することがあるが、これには理由がある。

スズメバチ類は一般に9月頃に個体数が最大となる一方、餌となる野外の昆虫類は姿を消しはじめる。

この頃、彼らは数多い幼虫を養うためにミツバチの群をしきりに襲うことはよく紹介されているが、スズメバチ同士の間でも戦いがしばしば起きることはあまり知られていない。

昆虫界では無敵のオオスズメバチは、同属の他のスズメバチの巣をも攻撃の対象とする

ために、狙われたほうのスズメバチは苛立って盛んに周囲を警戒飛行し始める。

こんな時に知らずに巣に近づいた人は不運と言うはかかない。

近年、宅地開発が進んだ結果、山林に隣接した新興住宅地などでは住居内への営巣例が絶え間ない。

被害の調査研究の歴史が浅く古い統計資料は無いが、近年刺傷被害のニュースが目につくのはむしろ人間が彼らの生活域を侵した結果とも言える。

ハブなどの毒蛇を含む全有毒動物による死亡例の内、そのほとんどがスズメバチによるものであることはまちがいない。

詳しい毒成分の説明は省略するとして、その特徴は哺乳動物に効果的で全身症状を引き起こすこと、さらに特異体質の人が死に至るまでの時間が多くの場合 1 時間以内と言う異常な速さにある。

この症状はアナフィラキシーと呼ばれる過敏症の人に特有のアレルギー性ショックと考えられている。

アレルギー性ショックは、抗原（毒成分）が体内に入った際に抗体が作り出され、これが 2 度目に入った抗原に対して異常に過剰な反応を起こすものであるから、過敏症の人は 2 度とハチに刺されてはならない。

それでも万一刺されたときは直ちに医師の診断と治療を受ける必要がある。

その際、できるだけ体を動かさず、他の人に救急車の手配などすべてをまかせたほうがよい。

刺されてから 30 分以上経つと手遅れになる場合もあるので、治療の成否は時間とのたたかいになる。

通常体質の人は放っておいても 1 晩程度で痛みはひくが、オオスズメバチに刺されるとはげしい痛みが翌日まで続くことがあり、またその傷痕が何年間も残る人もいる。